

日本台湾学会 ニュースレター

The Newsletter of the Japan Association for Taiwan Studies

第32号

<目次>

特集 記憶の中の台湾	
思い出の場所、思い出の人	… 1
学会・シンポジウム等参加記	…
前衛としての台湾文学	…
学界動向	…
日本における台湾原住民族文学研究	…
学会活動報告	…

わたしの勤めるアジア経済研究所（アジ研）では、入ってから3年くらい経つと、海外で2年間研究する機会が与えられる。当時はまだ大らかで、2年間の在外研究の成果を厳しく求められることはなかった。それよりも友達をつくってこいと、確かに小島麗逸さんだったと思うのだが、先輩には言われていた。わたし自身ももっともだと思い、大学や研究機関に客員の形で赴くよりも、留学して同級生たちと友達になりたいと考え、台大の経済学研究所の修士課程に入ることにした。推薦状の一通は劉進慶さんに書いていただいた。

しかし、赴任直前の8月にハプニングが生じた。

特 集 記憶の中の台湾 —思い出の場所、思い出の人—

台大男四舍 422 室の3年間

日本台湾学会理事長 佐藤幸人
(アジア経済研究所)

国立台湾大学男子第四宿舍（男四舍）は濟南路、徐州路、紹興南街、林森南路に囲まれたブロックに今もある。写真からわかるように何の飾り気もない。わたしは1989年の9月から3年間、そこで暮らした。



「国立台湾大学 男子第四宿舍」（男四舍）

日本と台湾が断交してから、アジ研では台湾研究が低調になり、台湾での在外研究は途絶えていた。そのため、台北の在外手当が規程ないことが、いざ行こうというときになって明らかになった。仕方なく当面はまず有給休暇を使い、それがなくなったら休職することになった。なお、規程は半年後に改訂され、2年目から通常の海外派遣に切り替えられた。おかげで結果的には通常よりも1年長く台湾にいることができた。

しかし、当初はいつまで休職のままなのかはわからなかつた。元々寮に住むことも選択肢のひとつとして考えてはいたが、いよいよ費用の格段に安い寮に住まるを得なくなつた。しかし、入学手続きのために9月に台湾に渡ったときには、入寮手続きはどうに終わっていた。

これは困ったと思ったが、「教官」が部屋を探してくれた。男四舎の4階が院生用になつていて、各部屋4人部屋だったが、実際には2人か3人で使っていた。そのおかげで何とか後から入り込むことができた。はじめ421室にいたが、422室の法律学研究所の高さんに誘われて、そちらに移つた。422室にはほかに、政治学研究所の韓国人留学生の安さんがいた。男四舎はお世辞にも快適な住処とは言えなかつたが、台湾の学生と一緒に暮らせたのはとてもよかつたと思う。

院生用の部屋には二段ベッドが2つ、机、本棚、ロッカーが1人ひとつずつあてがわれていた。わたしは下の段で寝ていた。部屋を移つて少ししてから、夜、電気を消した後、上の段の高さんとしばらく話したことがある。何を話したかは忘れてつたが、いつの間にか中国語をけっこう話せるようになつていて、気付かされたことを覚えている。

部屋にはテレビはなく、冷蔵庫は誰かが後で持ち込んだと思う。蚊がぶんぶん飛んでいたので、ベッドに蚊帳は必需品だった。一度、夜遅くまで宿題でもしていたときだったか、確かその晩だけで20匹か30匹の蚊を退治して、机の上に並べたことがある。

今は各部屋にエアコンが備え付けられているようだが、当時はなく、唯一、扇風機が頼りだった。夏はとにかく暑かった。4階建ての4階なので、天井が焼けてしまい、夜になつてもいっこうに部屋の温度が下がらず、なかなか眠ることができなかつた。明け方に屋上にいって、ようやく少し冷えたコンクリートの上に寝転がつて涼んだことも何度かあった。

トイレとシャワーは共同、バスタブはもちろんない。シャワーからお湯は出たが、冬はやはり寒かった。トイレの便器がどれもこれも歪んでいた

のが印象的だった。有料の洗濯機はあったが誰かが使っていることが多く、いつも固形石けんと洗濯板で洗つた後、最後に無料の脱水機で脱水した。寮はふきぬけになつていて、そこに脱水した後の洗濯物を干した。

寮の地下には自助餐の食堂と売店があった。しかし、男四舎の食堂で食べることはあまりなかつた。住み始めたばかりの頃、売店の緑豆湯を気に入り、毎晩のように食べていたら、けっこう太つてしまつた。

安さんとは3年間ずっとルームメイトだったと思う。高さんは修士課程を終えた後、兵役に就き、その後、ドイツに留学した。高さんの代わりに同じ法研所の蘇さんが入ってきた。蘇さんは卒業後、弁護士になった。台大での1年目の春節には白河の高さんの実家を、2年目の春節には高雄の蘇さんの実家を訪ねた。春節には寮の食堂も、周りの食堂も閉まつてしまい、食事に困るということもあって、客好きの台湾の友人たちは熱心に誘ってくれた。

男四舎の4階には同級生もたくさんいた。隣の423室にいた黄さん、陳さん、林さんとは今でも時々会う。特に台湾経済研究院にいる林さんとは仕事上の付き合いがあるので、頻繁に会つてゐる。留学して友達をつくるという考えは、やはり正しかつたのだ。

春節には黄さんら男四舎に住む同級生の家も訪ねた。黄さんのお父さんは外省人、お母さんが本省人だった。お父さんが食事の場で国民党寄りの話をして、黄さんが小さい声でそれは違うと言つていたのは、忘れない光景のひとつだ。

黄さんに限らず、経研所は教員も学生も反国民党色が強く、1990年3月の野百合学生運動をはじめ、国民党政権に対する抗議活動には多くが積極的に参加していた。野百合学生運動のときは、教員が率先して休講にしていたので、わたしも歩いて10分もかかる中正紀念堂に毎日足繁く通い、台大の学生証を見せて、学生たちの集団のかに入り、しばらく座つていた。

男四舎にはわたし以外の外国人留学生も住んでいた。アメリカ人と韓国人の同級生も男四舎に住んでいた。特にアメリカ人のリックとは仲良くなつた。日本人留学生も何人かいた。政研所にいた佐藤さんは夜が強く、彼と話をすると夜遅くまで続くことが多かった。時には夜が明けてしまったこともある。彼はその後オランダで学位をとり、今は台大哲学系で教えている。

男四舎では、睡眠以外では宿題をやつしている時間が最も多かつたように思う。経研所は宿題が多くつた。特に朱敬一教授のミクロ経済学では、毎

週、どっさり宿題が出された。いちおうはじめは各自自力で取り組むのだが、難題となると男四舎に住む同級生同士で回答を教えていた。この点でも寮に住んで正解だった。一度だけだったと思うが、難解な問題を同級生に先んじて解き、他の同級生たちに教えたことがある。あのときは何とも言えずいい気持ちだった。

男四舎のなかの遊びはトランプが多かったと思う。特に「拱猪」というナポレオンに似たゲームが流行っていた。遊び方を教えてもらったのだが、日本に戻ってからは遊ぶ機会がなく忘れてしまった。寮で酒を飲むことはほとんどなかったと思う。暗黙のルールのようなものがあったのかもしれない。

昔は自由に入れた男四舎も、今ではセキュリティが厳重になって入れなくなった。だいぶ老朽化し、元々何の美しさもない建物は、いずれ取り壊されるだろう。それでも3年間の思い出が消えることはないと、この文章を書きながら確信した。

半世紀前のあの夏、台湾で

池上貞子（跡見学園女子大学）

昨年夏、仕事で台北に2週間滞在しているあいだに、女子高校時代からの友人を誘って、数日間、台北付近を歩きまわった。ともに無事古稀を迎えることの記念と、半世紀前をしのぶ感傷旅行の意味あいがあった。

私がはじめて台湾に行ったのは、1967年、東京外国语大学3年生の夏休みだった。本当は前年から始まっていた、早稲田大学の学生を中心とする訪中団に加わって、中国大陸に行きたかったのだが、参加費15万円（当時の大卒の初任給は2～3万円）が自分で調達できなかった。その上、親戚の者が、当時「中共」と呼んでいた社会主义国への渡航に反対し、私より先に親を説得してしまったのである。

かわりに前述の友人と北海道一周旅行をすることにした。だが、計画を練るうちに、同じ費用で台湾へ行けることに気がついた。そこで、母の知り合いで、台湾から看護師の研修などを受け入れていた、隣村の開業医のところへ相談に行った。

余談だが、その時、医師が「僕のところには大陸からも『人民画報』や『人民中国』が送られてくるから、定期的に駐在さんが様子を見に来るん

だよ」と苦笑していたのが忘れられない。中国では前年にプロレタリア文化大革命が始まっていた。その後フランスの学生運動、アメリカのベトナム反戦運動、日本の全共闘運動など、世界的なうねりのあった時代だ。当時はGパン（ジーンズ）を穿いているだけでも“活動家”と疑われた。

その医師には台北市内で泊まるよう乙家を紹介され、その親戚の淡水の丙家も訪ねるように勧められた。そのうえ、彼の病院で研修中の台湾の女性Wさんが夏休みで帰省するので、現地ではずっと彼女に付き添ってもらえるよう手配してくれた。Wさんは当時20代後半、基隆港に迎えにきてくれてからおよそ3週間、台北をはじめ、高雄、台南、日月潭などを案内してもらった。そのあいだに生い立ちのようなものを知った。

大陸生まれで、幼い時、地主だった父と母が目の前で殺されたことは、忘れようにも忘れられないという。親戚に連れられて、台湾に渡って来たらしい。人間が、国家が信じられず、自活できる手段として看護師の道を選んだということだった。その後、数年して研修を終えると、カナダに移民したまま、消息は絶えている。

台湾への往復は費用の関係で、帰路のみ飛行機にして、行きは鹿児島まで列車、その後は沖縄を経由しながら船で行くことになった。当時、沖縄はアメリカの占領下にあったから、ビザを取って行った。まばゆい太陽の下の南部戦線跡では身体が震え、自らの無知を恥じた。一方、はじめて手にしたドル紙幣や本土と味の違うコカ・コーラに「外国」を感じた。台湾行きの船を待つあいだに数泊した那覇の安宿では、本土から宮古島に帰省するという女性と相部屋になり、小柄な私と友人は「中学生二人だけで旅行なんて偉いわね」と言われたりした。本当は別室に友人の父親がいて、台湾上陸まで同行していたのだが。

基隆でWさんに会うとすぐ、乙家で最近不幸があって、客を泊められなくなったということを知らされた。その代わりに丁家に泊まることになった。丁家は町中の高級マンションの1フロアを占めていて、吹き抜けの中庭があったように記憶する。主人は役所勤めで、ほかに文房具店など2、3経営しているという話だった。夫人は恰幅のよい、気取ってはいないが、いかにも人を使うことに慣れた人で、洗濯などは通いのおばさんにやらせていた。大学生の息子と高校生の娘はともに利発さ機敏さにあふれて、私たちのために友達を家に招いて紹介するなど、気を使ってくれた。

ある日、Wさんの案内で、もともと泊めてもらうはずだった乙さんと外で会った。小学校の先生だととかで、日本のどこにでもいそうな、短髪をパ

一マにした中年女性だった。手首に結んでいた質素な素材のミサンガのようなものは、喪中のしるしだということだった。WさんとZさんの話を聞いているうちに、ふと違和感をもった。ふたりは別種類の雰囲気をかもしだしていた。中国語の話し方も立ち居振る舞いも、何となく違うのである。

その後、列車に乗って、Zさんの親戚の淡水のC家を訪ねた。医師がぜひ行けと勧めてくれた家だ。大きな本屋さんで、使用人も大勢いた。魚肉団子など、海の幸いっぱいの手料理をごちそうになった。高校生の女の子がおしゃれなワンピース姿で、町中を案内してくれた。彼女の人当たりや家の雰囲気に、台北で泊めてもらっているT家、そしてその家の人々とは違うものを感じた。

T家は外省人、ZさんやC家は本省人。私の違和感がそういう言葉で表される事柄なのだと認識したのは、この旅の最中だったのか、それとも帰国後だったのか、はっきりとした記憶はない。しかし、その学年度末になって、一般教養で履修していた中嶋嶺雄講師の授業で、レポート代わりに、この言葉と感覚をキーワードにした台湾旅行記を提出した。すると先生は意外なほど関心を示され、私は一員ではないのにもかかわらず、先生のゼミの論文集に掲載してくださった。

ただし、当時、中国関係のベンキョーをしている者にとっては、台湾に行ったことは秘すべきことのような感覚があったため、筆名を使った。こうした私にとっての呪縛が薄れてきたのは、80年代後半になり、張愛玲関連の資料集めやシンポジウム参加のために、数年おきに台湾に行くようになってからである。

半世紀前のあの夏に高校生だった淡水のC嬢とは、その後も互いの結婚や育児を含む人生を共有しながら、間欠的に交友が続いてきた。もちろん昨年の感傷旅行でも淡水を訪ねた。ただ、Cさんはずっと淡水で暮らしていたわけではない。結婚後は、台北で歯医者の夫を助けながら華道を教え、子育てをし、同居していた姑も看取った。老後は淡水で過ごそうと早くから住居を確保し、様変わりする故郷をずっと見守りつづけてきたのである。

一方、張愛玲を手掛かりにアカデミック台湾に関わるようになった私であったが、いつの間にか台湾の文学の翻訳もするようになった。朱天文、王禎和、平路、焦桐、席慕蓉、李永平、齊邦媛、夏宇、陳芳明……対象に関しても自分に対しても、生半可な知識と宙ぶらりんな認識のまま、無自覚のうちに有意義な仕事をする幸運に恵まれた。そんな私の台湾認識の根底には、やっぱりCさんがいるのではないかと思う。彼女とは、文学と関係があると言えるのは、70年代に愛読書として瓊瑤

の『窓外』を送ってもらっただけ。当時の私はそれと研究とを結びつけることなど考えもしなかった。もしかして、そこで一步踏み込んでいたら、私と「台湾文学」との関係はもう少し違ったものになっていたのだろうか。

台湾綜合研究院での思い出

赤羽 淳（横浜市立大学）

自分が台湾の経済・産業研究に関わってすでに10数年になるが、そのきっかけとなったのが台湾綜合研究院での短期研修であった。1997年の6月、7月というわずか二ヶ月間だったが、いま振り返るといろんな刺激と体験に満ちた時間だったと思う。自分はまだ二十代だったが、吸収力の高い若い時にこうした機会に恵まれたことも、非常に幸運なことであった。

当時の台湾綜合研究院は、南京東路五段の中華開發大樓にあった。自分は、南京東路二段のサービスアパートメントに居を構えた。バスで約10分の通勤である。もっとも、朝の9時から台北駅付近許昌街のYMCAで中国語を勉強していたので、研究院に顔を出すのは毎日11時近かった。一応、日本の三菱総研から来たお客さんということで、所長室の隣に個室ももらえた。本当に贅沢な話であった。

台湾綜合研究院では日本語の話せるTさん、Rさんが主に面倒を見てくれたが、それ以外の方々も非常に親切にしてくれた。研究院自体が立ち上がって間もなく、外部の研究員を受け入れたのが初めてだったということもあるのだろう。当時の自分は中国語もまだうまくなかったので、皆さんとの会話がままならないことも多かったが、それでもそんなに苦労したという記憶はない。

研修期間中、自分が取り組んだ研究テーマは台湾の対外投資であった。その頃の台湾は世界でも有数の外貨準備高を誇っており、台湾資本が積極的に海外へ向かい始めていた。今でこそ、対外投資に関しては豊富な研究が蓄積されているが、当時ではあまり掘り下げられていないテーマだった。

自分は経済部投資審議委員會の統計を丹念に整理し、台湾の対外投資動向を把握するのに腐心した。中国語の資料は当時の自分にとってやはり難しく、見方がわからないときにはTさんやRさんに教えてもらった。また、この時に初めて國家圖

書館に連れていってもらい、館内の利用方法や資料収集の仕方も教えてもらった。いま思えば、自身の台湾研究の基礎の部分がこのときに出来上がつていったのだろう。

自分はそれまで台湾には旅行や仕事で何度か行っていたし、政治や経済に関する関連書籍を読んでいたので、台湾のことはそれなりに知っているつもりであった。しかし現地に住んでみて、体感で理解しないと見えてこない部分も大きいとつくづく感じた。

たとえば、研究院の仲間と一緒に昼食をとっていたある日のことである。食堂でみていたテレビが、政治意識に関する討論番組を放送していた。するとそれまでなごやかだったメンバーが、テレビに釣られて激論を交わしはじめたのである。内容を全部理解できたわけではないが、台湾の人がここまで政治信条を明確に持っていることに、日本人の自分は大きなカルチャーショックを受けた。

また別の日の夕方のことだが、自分の部屋の隣の会議室で会議が延々と長引いていた。ただ聞き耳を立ててよく聞いてみると、どうやら株の話をしている様子なのである。結局、その会議(?)は自分が帰宅した18時の時点でもまだ続いていた。その他にも、一時間半のお昼休みはほとんど人が昼寝をしていること(中には寝袋を持ち込んでいる人もいた)、15時になると女性は果物を剥いて食べること、そして男女関わらず多くの人がバイクで通勤していること、などなど当時の自分が驚いたことは枚挙に暇がない。

これらは台湾の経済・産業研究とはあまり関係のことだが、地域研究を行うのであれば、こうした生活や文化の次元からまるごと台湾を理解することが大切だと思った次第である。

こんな楽しい時間はあつという間に過ぎ去り、また三菱総研へ戻った。しかしひか月という滞在はやはり短すぎる。本格的にもっと台湾のことを勉強したいと考え、自分は1999年から台湾大学へ留学した。紙幅の関係で詳細は割愛するが、この留学生活は苦労の連続であった。ただそうした苦労がなければ、自分の経験値もここまで上がらなかつただろう。台湾綜合研究院での研修が「ホップ」であれば、台湾大学への留学は「ステップ」であったと思う。

今は大学へ転出してすでに五年が経過し、最近では縁あって台湾の経済部、工業技術研究院、資策會などと一緒に仕事をする機会に恵まれている。そうした中、残念なのは台湾綜合研究院の話が業界の中であまり出てこないことである。どうやら事業構造を転換し、エネルギー分野へ特化したと

のことだ。以前お世話になったTさんやRさんも、風の便りではかなり前に退職されたようである。

競争原理が厳しくなる中、組織も人も変化が避けられないのは世の常である。でもそんな現実の中で、あの牧歌的な台湾綜合研究院での日々は、今の自分にとって忘れられない思い出になっている。

はじめての台湾訪問記

栗原 純(東京女子大学)

1981年3月、はじめて台湾を訪問した。当時はまだ戒厳令の時代であり、夏休み中に帰省した留学生が行方不明になり、新学期が始まても日本に戻って来ず、連絡もとれない、あるいは党外の指導者の家族が白昼、台北の中心街にある自宅で「強盗」に殺害され、犯人は不明のままなど、台湾については不安な情報が多くあった。飛行機が着陸すると、機内では台湾では日本の新聞、週刊誌のたぐいは持ち込めません、座席にそのまま置いてお降りください、というアナウンスが流れた。にもかかわらず、大陸の出版物や台湾関係の研究書をスーツケースに入れていたので、入国に際しては緊張した。

戦後、社会主義を掲げ、人民公社を設立した中国社会の発展をみて、日本の中国史研究においては、封建社会からどのようにして近代、資本主義社会への発展がみられたのか、封建社会における「資本主義の萌芽」に関心がもたれていた。

そのことは、台湾史にあてはめると、日本の植民地統治がどのような歴史的条件のもとに開始されたのか、清末の台湾社会の発展段階の分析が重要とされることになる。私も清代台湾における土地所有関係について修論をまとめたいと思い、台湾渡航の目的はそのための史料の蒐集であった。清代の台湾では、土地開発にともない、大租戸—小租戸—現耕佃人という複雑な土地所有関係、一田両主制が形成され、日本統治の初期、地租の確保とともに、この「前近代的」土地所有関係の解消が課題とされていた。

ただし、土地所有関係といっても全島を対象とするのは大変なので、米作地帯として知られた中部を対象とすることにしていたので、その中心都市、鹿港が目的地であった。

鹿港は清代には大陸向けの米穀の代表的な移出地であり、対岸との交易で栄えた港町であった。日本統治の時代になると、辜顯榮の出身地として知られるが、大陸との交流も制約され、また南北縦断鉄道からも遠く離れて交通の便も悪く、鹿港はかつての繁栄から取り残されていく。多くの歴史的遺産のある街にもかかわらず、私が訪問した頃には、泉州人の廃港などと称されていた。

清代の台湾には埤圳と称される多くの灌漑施設が建設され開発に資せられていたが、中部平野には八つの堡を貫くことから八堡圳と称される大規模な灌漑施設があった。八堡圳は康熙 58 年に竣工したといわれるが、鹿港にはこの施設を建設、経営してきた施一族が在住しており、その会館があることが知られていた。

清代の鹿港は海からの強風を防ぐため街全体がアーケードのような独特の構造をしていたとされるが、その面影はすでに失われていた。しかし、施一族の方から族譜や八堡圳の写真などみせていただき、史料で繰り返しお目にかかった地名や街並みを実際に歩いた体験、また一族の方から得た直話のおかげで、史料の記述が身近なものとなり、私としては大変有意義な旅行となった。

また、このときの鹿港訪問に付随して、もうひとつ目的があった。現在、南投にある国史館台灣文献館は、当時、台湾省政府の管下にあり、台中市内にあった。台北から鹿港に行くためには台中市を経由するわけだが、そのため、市内の黎明新村にあった文献委員会の訪問を予定に入っていた。

文献委員会が総督府文書を保管していたことは日本でも知られていたものの、その実物は非公開とされていた。ただ、限られたごく一部の中文訳が文献委員会から発刊されており、代々木の東豊書店に並べられていて、私も阿片政策、余清芳関係などの訳文を手に入れていた。しかし、台湾出身のご主人からは、訳文はあくまでも判読しやすい史料の一部であると聞いていた。そのため、どうしても統治初期の土地関係の文書を閲覧してみたい、というのが私の念願であった。

戒厳令の時代に非公開とされていた史料をるために何をすべきかを考えて、私はかつて文献委員会に関係していた二人の研究者を台北で訪問して紹介状をいただくことにした。

お一人は王世慶先生、もうお一人は王詩琅先生である。王詩琅先生をご自宅に訪ねると、日本から若者が来たということで、戦時中の大陸における活動など、それこそ台湾史の一部そのものといえるご自身の体験をいろいろ聞かせていただいた。やや不自由な右手で書いてくださった紹介書の文

字をながめて、読みますか、と繰り返し訊ねられたときのご様子は今でも忘れないものがある。

このお二人の紹介状のおかげであろうか、文献委員会の主任委員林衡道先生の鶴の一声で、総督府文書を閲覧することができた。ほんのわずかな時間ではあったものの、総督府文書に触ることもできて、私のはじめての訪問が大変印象深いものになったことを記憶している。

その総督府文書もいまではデジタル化されて、インターネットで閲覧可能となり、しかも、2016 年 9 月からは無料化されて、自宅から自由に閲読できるようになった。台湾社会の民主化、本土化にともない、歴史研究の条件、状況も隔世の感がある。

運ちゃんに感謝

野間信幸（東洋大学）

陽明山から台北市内に下りてきたバスは、学会帰りの人たちを満載していた。この日（2010 年 9 月 11 日）は、天理台湾学会が第 20 回記念研究大会を中国文化大学等と共に催したシンポジウムの最終日で、参加者は大学が用意してくれたバスで帰路についていた。

バスが市街地に差し掛かった時、同乗者が大きな声をあげた。「師傅、在這里停車」（ここで停めて）。おそらく宿の近くまで来たのだろう。しかし運転手は聞こえなかったのか、いっこうに速度を緩めない。声の主は少しボリュームを上げて再度訴えるも効き目がなく、次に「師傅」を「先生」と呼び替えてみたものの、まったく反応がなかつた。運転手は何か考え方でもしているのだろうかと、車内の面々が不安げに顔を見合わせたとき、誰かが「運ちゃん」と大声で呼びかけた。すると運転手が即座に「什麼事」と返答した。車内は一瞬静まった後、なごやかな笑いに包まれた。それは台湾語「運ちゃん」の効力に対して、驚きと納得が入り混じった笑いであったように思う。台湾語の中に定着した日本語は他にもあるが、「運ちゃん」は最もポピュラーな例のひとつであろう。

「運ちゃん」といえば、忘れられない顔が浮かぶ。横山やすし、ではない。嘉義と高雄で数年間にわたってお世話をした計程車の運転手、李崑裁さんと簡金安さんである。

市街地での調査にタクシー（計程車）は必要なくとも、たとえば作家張文環（1909～78）の生誕地である太平（大坪）は、標高千mの山の中にある。張の作品「雲の中」の舞台になった太平山は、標高2千mである。客家の作家鍾理和（1915～60）の屏東にある生家は、美濃から直線距離で20kmほど離れている。このような所に出向く場合、タクシーのお世話になる。しかし一期一会の縁で乗り捨ててしまう「流し」では心許ない。満足に調査するためにも、腕前の確かな運転手とエンストしそうにない車を選ぶ必要がある。そういう運転手を選ぶのにはコツがあるが、ここでその話題に立ち入る余裕はない。

出会いの経緯も省かざるを得ないが、嘉義で出会った李さんとは2007年8月から2012年9月に廃業されるまでお世話になつたし、高雄の簡さんには2011年から乗せてもらっている。李さんとは同じ年で、簡さんは10歳ちかく年上だ。

李さんには張文環の事跡や作品舞台（「夜猿」「地方生活」等）の調査に絡めて、嘉義県の龍眼や出水坑に行ってもらった。

龍眼は太平から北へ4kmほど奥に入った山村で、道は地図でもよくわからない。現場に行って勘に頼って進んでゆくしかない。太平から入り、最初は一車体分あった山道が、途中から竹林の細道に変わる。しかも傾斜のきつい坂道が続く難路であった。しかし李さんの運転技術は確かで、この人を選んだ自分の眼力を自慢したい気分であった。

2年後の2009年9月には、出水坑に向かってもらった。出水坑は太平の東南方向にあり、阿里山系の山中にある寒村である。李さんは行ったこともない場所ばかり指定する私に、そこに何の用があるのかと怪訝な顔付きを見せるのだが、頼めばいつも気安く承諾してくれた。

2009年といえば、8月に台湾南部を台風8号が襲い、深層崩壊による大規模な崖崩れや水害が発生して、各地に甚大な被害をもたらしていた。まさか嘉義に被害が及んでいるとは思ってもみなかつた。出水坑を目指して竹崎から上つてゆくと、途中から道に巨石が転がり、路肩はえぐられ、道がぬかるんで危険な状態であった。まもなく工事の車に行く手を塞がれてしまった。出水坑とは名実の一致する地名であったと、遅まきながら理解した。

しかしこの程度のこと諦めるわけにいかず、逆方向から、つまり太平方面から出水坑に向かうよう提案すると、李さんは快諾してくれた。引返すだけでも一苦労なのに、竹崎→梅山→太平へと千m駆け上がっての再挑戦である。ところが太平

を出て5分も行かぬうちに、またも崖崩れで通行止めになつた。万事休すであった。

翌年も翌々年も再調査を試みたが、復旧は遅れ、出水坑まで辿り着けなかつた。李さんも家族から止められたのだろうか、竹崎からはどうしても上つてくれなかつた。2011年、今年こそ復旧しているだろうと期待して、宿から李さんに電話を入れた。ところが李さんは「済まない、もう車から降りたんだ」と言って、電話を切つてしまつた。仕方なく、別の車で出水坑に向かつた。当地はまだ工事をしていたが、ユンボのアームを上げてもらって通り抜けることができた。ようやく目的は達したもの、何か物足りない気分が残つた。

もう一人の「運ちゃん」の簡金安さんには、美濃の竹頭庄に点在する土地廟巡りに付き合つてもらつたり、屏東県高樹郷の鍾理和故居や麟洛郷の六堆客家文物館などに行ってもらつた。こうして動き回るうちに、鍾理和は南部客家が集い住む「六堆」地域の中で、自己形成を行つていたことに気付いた。その成果の一部は、『たばこ小屋・故郷—鍾理和中短篇集』（研文出版）の「解説」にいくらかは反映できたと思う。昨年は鍾理和紀念館の背景にたたずむ笠山（尖山）の奥に入つてみた。道が狭くなつくると、掘つ建て小屋がぽつんと現われ、ガラの悪そうな男に「早く帰れ」と凄まれたりした。辺りに黒狗がうろついていて、笠山農場の成れの果てを見た思いがした。

さて簡さんとのいちばんの思い出は、簡さんには申し訳ないが、交通事故の件にある。尤も簡さんの運転は慎重だし、腕前も確かなのであるが、この時は不可抗力としか言いようのない事故に巻き込まれてしまった。道端に停車中、老人の運転するミニバイクが後方から突つ込んで転倒してしまつたのである。旗山の北西20kmほどの所にある内門という町のことだ。なぜ内門にいたのかといふと、地図では内門のすぐそばに内埔という場所があり、これを戦後に鍾理和が勤めた高雄県立内埔初級中学のある内埔と間違えてしまつたのだ。この頃は鍾理和の調査をし始めたばかりで、私の勘違いが事故の遠因を作つてしまつたともいえる。

事故後の簡さんの対処は、冷静で立派であった。事故の現場でありがちな自己主張などせず、老人を介抱して病院へ運び、警察や家族にも連絡をした。私は内門で捨ておかれても帰ることができないので、事後処理に最後まで付き合うことになつた。ともあれ、不慮の出来事に襲われたときにその人の値打ちが出るものだ。このことがあってから簡さんへの信頼と親しみが増して、美濃や六堆に出向くときにつつも乗せてもらうことになつた。

ささやかな私の調査であっても、助けてくれる人があつてこそ行きたいところに行けるのだ。わかっていることではあっても、あらためて「運ちゃんに感謝」である。

台南研究の拠り所 —「日式房子」—

植野弘子（東洋大学）

台湾で懐かしい思いがする場所の一つは、台南市佳里區蕭壘文化園區のなかにある「日式房子」である。かつての明治製糖株式会社蕭壠工場の工場長用宿舎であり、日本統治期の台湾の官舎と同様に、日本家屋の趣をもって建てられた。戦後に改装されながらも、建物自体は今も残っている。塀に囲まれた広い庭には、様々な樹木が植えられ、裏には橋の架かった小さな池もある和風の庭が見える。

「日式房子」、つまり「日本式家」と通称で呼ばれているこの建物は、現在、南瀛国際人文社会科学研究センターの活動のベースとなっている。私はこの研究センターの学術委員を務めているが、「日式房子」で会合を開き、また調査のために泊まったりしている。

南瀛国際人文社会科学研究センターは、文字どおり台南地域の人文・社会科学的研究を国際的に行うことを目指した研究センターである。台南を研究対象とする台湾内外の研究者で組織しており、現在、学術委員として外国人研究者3名、台湾人研究者8名がいる。日本台湾学会のホームページに、毎年、大学院生を対象とした台南研究のための研究助成金のお知らせ、また3年に1回開催される「南瀛研究国際学術研討会」のお知らせを掲載していただいているが、研究助成の審査を行い、過去4回の国際シンポジウムを開催しているのは、当研究センターである。

この研究センターを立ちあげた功労者は、フランスの人類学者 Fiorella Allio（艾茉莉）氏と台南縣長蘇煥智氏である。艾茉莉（いつも中国語でこう呼んでいるので敬称な

しで失礼させていただく）と私は、長期滞在型のフィールドワークを同じ台南縣西港郷で行っている。しかし、私が1980年代前半に滞在したのに対して、彼女は1980年代後半に西港でのフィールドワークを始めた。その後、私も彼女の噂は聞いていたが、1990年代前半は中国大陆でのフィールドワークが続き、1990年代後半に再び西港に行くようになつたときには、彼女とはいつもすれ違ひばかりで、会いたくても会えない状態が続いた。あとで彼女も同じ思いであったことを知る。

ついに会えたのは、2000年、西港慶安宮の3年に一度の大祭「刈香」の折であった。いまもそのときのことは鮮明に覚えている。大祭の期間は調査に忙しくて話す時間もなかった私たちは、その後、台北で再会した。そして、台南に国際的な研究センターを立ちあげたいという彼女の話を聞き、なにと一緒にできるだろうかと語り合って意気投合し、古い友達のような間柄となった。

たしかに、西港のフィールドを通じて、長い間、会わないけれども私たちは互いを知っていたし、彼女は、フランスで、私の日本語の論文を日本人留学生に訳してもらって読んでいたという。台南でのフィールドワークが縁で、フランス人の友人ができるとは、思いがけないことであった。

そのあと、2001年は在外研究でイギリスにいた私が、2002年9月になって台南に戻ったときは、艾茉莉と蘇縣長の間では、国際研究センターの話は、既にゴーサインの出た話となっていた。蘇縣長は、台南の文化的活動、環境保護、また研究活動には大いに思い入れのある方である。縣長にお会いしたところ、センターの方針は、研究者たちが進めたいようにすればよいとおっしゃる。それから3日間、艾茉莉、学術委員となった中央研究院台湾史研究所の林玉茹さん、縣長の秘書などと



「日式房子」（当研究センター研究助理・温勝智氏撮影）

話し合いを重ね、活動方針を決めた。そして、2003年4月に研究センターが開設される運びとなった。

この間、艾茉莉は、法国現代中国研究中心台北分室主任として台湾に滞在していたが、研究センターの立ちあげは、彼女の働きがあってこそあり得たのである。「日式房子」は、研究者たちが宿泊できるように改装され、そのインテリア、食器なども、艾茉莉が吟味して整えた。

この研究センターは、「国際」と銘打っているが、地域の人々と台南研究者の間をつなぐ役割を果たすことも、我々が目指すところである。研究する折には地元の研究者との連携を図ること、台南の人々の郷土への関心に寄り添う活動に取り組むこと、資料の収集保存を進めることを方針としてきた。また、台南研究の次世代養成についても、最初の話し合いの折から出していた。これは、今、台南市政府による院生のための研究助成として形になっているが、最初は、蘇縣長がご尊父の名を冠した「紀念蘇添水先生南瀛学一博碩士論文研究奨」として提供したものであった。

本研究センターは、最初は実質的には台南縣政府からのサポートを受け、国際シンポを開催し、研究活動を行ってきた。そのため、2010年の台南縣市合併の際には、研究センターもどうなることかと危ぶまれた。しかし、台南縣文化処長の葉澤山氏が台南市文化局長となって、引き続き我々の活動に理解を示し協力してくれたことはありがたいことであった。現在、台南市政府のサポートを受けながら、研究センターは運営されている。そのかわりというわけではないが、台南市が主宰する「台南文化大学」の講師を、センターの学術委員は積極的に務めるなどの活動を行っている。

これを書きながらも、「日式房子」の門から玄関へと続く庭の様子、タイル貼りの流しのある台所などが目の前に浮かんでくる。なんとも懐かしい想いがするのは、古い日本式建築の名残があるからであろうか。木の窓枠のある、風の通るリビングでは、会議をすることも多い。思い返すと、蘇縣長は、在任中にはご多忙にも関わらず、会議にしばしば参加して下さった。「栄誉委員」をお願いしていた曹永和先生、陳奇祿先生が、会議にお見えになったことも懐かしい。センターは、今は、事務所と資料館を別にもっているが、この「日式房子」は特別の場所である。ここを拠り所として、台南の研究とともにしようと思わせてくれた場所であり、過去を考え、地域との関わりを感じずにはおられない場所といえよう。

今回、この研究センターのことを取り上げたのは、台南研究を志す人が増えてもらいたいという思いによる。「国際」と銘打った研究センターにふ

さわしいように、外国人研究者の学術委員としてのリクルートが、今のセンターの課題といってよいからである。

台湾の産業・軍事遺跡と経済史研究

湊照宏（大阪産業大学）

台北を基点に資料調査する者にとって、2007年の台湾新幹線開通は、移動効率を大きく上昇させるものであった。台北・高雄間は最速の自強号で約4時間かかっていたが、台北・高雄（左営）間は最速1時間半に短縮された。こうした移動時間の短縮化は、植民地期台湾を分析対象とする研究者にとって、当時（植民地期）の地理感覚から遠ざかってしまい、自身が当時の状況をイメージにくくなってしまうおそれを抱かせる。そうしたおそれを少しでも軽減しようと、筆者はときどき植民地期の産業遺跡を見学するようにしている。

観光地でにぎわう水力発電用に建設された日月潭ダム、嘉南大圳の烏山頭ダムも、植民地期に建設されたインフラ設備として、現在も稼働中の産業「遺跡」に含まれるであろう。植民地期台湾経済に関する研究は、戦後の経済発展につながるようなインフラ（鉄道、水利、電信電話、電力）に関する研究成果が近年多く公刊してきた。そうした研究全てが戦後の経済発展への「連続」を主張しているわけではなく、インフラ導入による現地住民の混乱や、インフラを積極的に利用した台湾人資本・商人の活動など、学界として検討評価すべき論点を豊富化しつつある。

1934年に日月潭ダムが完成すると、アルミニウム精錬業などの電力多消費型産業が新規に立地したほか、既存の鉱業も電力を大量消費する機械化を進めた。初夏に訪れた金瓜石鉱山跡は、青い空との距離を近く感じる山の新緑が映える風景のなかに、巨大な選鉱精錬施設であった古びたコンクリートが城壁のように入り込み、自然と人工とのコントラストが印象的であった。同鉱山は1930年代に日産系の日本鉱業会社によって買収されて以降、設備が大幅に拡張され、電力を大量消費するようになった。鉱物は専用鉄道によって基隆港に運ばれた後、大分県にあった同社の佐賀関精錬所に送られた。当時の新聞によれば、金瓜石鉱山の労働者は約8300人で、その家族を合わせれば住民は1万54000人にたつしたという。鉱物を運んだ

鉄道レール痕を見ながら当時の活気を想像すると、なぜか「むかしの光　いまいすこ」と、『荒城の月』の一節が頭に浮かんだ。

1930年代に進展した台湾の工業化は、前述した日月潭ダム完成のほか、南進政策との関係で説明されることが多い。日本海軍にとって台湾の軍事的重要性が急激に高まったのは1930年代末頃であり、第六燃料廠や第六十一航空廠を含む様々な海軍軍需工場が建設された。航空燃料を製造する第六燃料廠は高雄本廠のほか、新竹および新高に支廠を有し、新竹支廠の施設の一部は現在も残っており、軍事遺跡の様相を呈している。また、航空燃料の添加剤である臭素が、鐘ヶ淵曹達工業会社台南工場などで製造された。その施設の一部は現在の台南市安南区にあり、「原日本鐘ヶ淵曹達株式会社台南工場宿舎群」として直轄市定古蹟となっている。

これらの施設はまさに海軍の南進政策と関係するものであるが、その詳細に関する経済史研究は進展していない。黒マグロや桜エビで有名な東港にも戦時には航空廠の分工場が設置され、飛行艇の基地が建設された。軍事遺跡と称し得る基地跡地を含む一帯は大鵬湾国家風景区として整備されており、対英米開戦を前にした日本海軍にとって台湾が有した軍事的重要性について、散歩しながら考えることができる。

ただし、留意すべき点は、植民地期台湾の産業構造は、農業を中心とする第一次産業が圧倒的な比重を占め、比重を上げつつあった第二次産業の製造業においても紡績・精米業や製糖業といった農産品加工業が中心であったことである。それにもかかわらず、植民地期台湾経済を分析対象としてきた筆者は、恥ずかしながら、農業に関する知識は皆無に等しく、製糖業に関する知識も乏しい。筆者は、こうした「なんちゃって」台湾経済史研究者を長年装ってきたが、自身の製糖業に関する勉強不足を埋める機会を得ている。日本経済史・経営史分野で労務管理が専門の杉山裕氏（大阪経済法科大学経済学部准教授）を代表者とする科学的研究費助成事業基盤研究（C）「戦前期の海外進出企業における内部労働市場の分析—社員名簿に基づく実証研究」（2015-17年度）の研究分担者に加えていただき、製糖会社の社員名簿から内部労働市場を検討しようとしている。植民地期台湾経済研究において労働に関する研究は数十年間ほとんど進展していないが、日本経済史・経営史研究者との共同研究によって、大きな進展をみせるかもしれない。現時点では筆者は何の戦力にもなっていないが、労働の視点から植民地期台湾経済の主導

産業であった製糖業への理解を深めていきたい。そのためには製糖工場跡の見学は必至である。

高雄の橋頭糖廠（旧台湾製糖会社橋仔頭工場）は敷地全体が台湾糖業博物館として整備されている。もちろん植民地期の施設・設備がそのまま配置されているわけではないだろうが、敷地内の巨大なレイアウトから製糖工場の工程がイメージできるようになっている。橋頭糖廠には、新幹線高雄（左営）駅から2008年に操業開始した高雄MRTに乗車し、前述した海軍第六燃料廠のあった楠梓を通過して15分足らずで到着するので、台北からの日帰りも可能である。植民地期台湾の地理感覚から遠ざかってしまう台北・高雄間日帰り出張のなかに、植民地期台湾経済のイメージを豊富化し得る製糖工場見学を組み込むことになる。

廃墟に潜る

倉本知明（文藻外語大学）

台湾には廃墟が多い。とりわけ軍港として発展した左営周辺には、歴史の断層がさながら千層蛋糕のように浮かび上がっている。ある時期、僕はやがて朽ちていくであろう廃墟の色や形を、龍虎塔で有名な蓮池潭から左営の海軍基地に向かって散策しながら観察することを秘かな楽しみにしていた。

市内の騒々しさとは打って変わって、夕暮れ時の蓮池潭にはその濁った湖面を揺らすほどの喧騒はどこにも見当たらない。僕はハロウィーンのパンプキンのようにギザギザに割り貫かれた清朝時代の城壁跡地を横切って、古い廟と小吃店がモザイク状に立ち並ぶ街を突き抜けていく。しばらく歩くと、真っ黒なライフルを肩に掛けた歩哨が立つ左営軍港に行き当たる。駆け足の一等星を見上げるその義務兵が自分の教え子かもしれないと思う僕はこっそりとその顔を盗み見みるが、鈍色のヘルメットを目深にかぶった表情を確認出来ないまま通り過ぎていく。

背後に目をやれば、巨大な戦艦のような半屏山が浮沈艦ながら黄昏の靄の中に浮かんでいる。山頂からは左営の街並みがぐるりと見渡せ、中腹にはセメントで固められたトーチカが砂撒いたように点在していた。このトーチカが米軍の上陸を想定してつくられたのか、それとも中共軍の「解放」を阻止するためにつくられたのか、僕は地元の登山客に尋ねてみたことがあった。そんなこと

よりもうちの貴賓犬がお腹を下して大変なんだ。高齢の登山客は真っ赤な手編みのセーターを着た貴賓犬を胸に言った。若い頃にさ、俺は外島勤務だったんだ。ほらあの方向だよ。登山客はそう言って、小指と薬指の欠けた右手で遠く金門島のある方角を指差した。

港都の二つ名を持つこの都市にほんのかすかな潮の香りもしないことを不思議に思いながら、僕は地図の上では海のすぐ側にあるはずの空き地に入っていく。都市に浮かぶ痘痕のような廃墟。数年前にこの場所を訪れた際、地元の高校生たちが半ば廃墟^{クラシック}となつた街並みを反共時代の街並みを模した復古的なアート街に作り変え、中北部から来た観光客たちでずいぶん賑わっていた。確かに大陸からの観光客もいたはずだ。反共復国、大陸反抗、中美合作……。死後硬直したまま長年放置されてきた死語たちが、いまにも崩れ落ちそうな煉瓦の壁にまっさらなペンキで塗りつけられていたのははっきりと覚えている。僕は「打倒倭寇」と書かれた壁の前で足を止めるが、そこには腰の高さまで伸びたスキがさらさらと喉を鳴らしてただけだった。

いったい、痘痕も笑窓とはいかないものだろうか。自助新村と呼ばれたこの地区は、数年前に中華民国国防部の計画に従って立ち退きが進められ、住民のほとんどはすでに新しく建て替えられた国民住宅へと引っ越してしまっていた。

廃墟と呼ぶにはあまりにも閑散としていた。村の入り口近く、新たに清朝時代の城門跡が見つかったという場所には、保存調査のために青い巨大なブルーシートがかけられていて、はた目から見ればどこか殺人現場を思わせた。「被害者は清朝人、性別不明、死後すでに100年近く経っています」「犯人は?」「日本人。殺害後に被害者を地中深くに埋めたようです」「なるほど。時効は成立、うまく逃げられたな」僕は保存調査に来ていた市役所の人間と二人、廃墟となつた家屋のバスタブに腰を下ろして大いに笑い合つた。うちは遺跡を大切にしませんからね。件の職員は眉をしかめて言った。いっそ日本にこの場所を買い取つて保存してもらいたいくらいですよ。あながちお宅と無関係つてわけでもないんだから。

細く伸びた城壁沿いでは、主を失つた流浪狗たちがじゃれ合つていた。僕は壁を削り取つて作られたような石段を登つていく。そこには日本時代に建てられた遙拝所があつたらしく、いまでもその台座の跡を見ることが出来た。古い地図を開けば、ここにはかつて日本帝国海軍の基地があつて、震洋と呼ばれる中古自動エンジンを使用したベニア板製の自殺攻撃艇の出撃訓練地として機能していたらしいことが分かる。「志願」した隊員の中に

は台湾籍の兵士もいたらしいが、彼らはこの遙拝所で誰に向けて何を祈つたのだろうか。媽祖^{マースー}であれ、天照であれ、かへりみはせじと出征した彼らに果たしてシンブツの加護などあつたのだろうか。知つてゐるか? この近くにはㄓㄨㄥㄨㄥㄚㄥㄍㄉㄤも住んでいたんだぞ。ほんやりと考え込む僕に向かつて、地元の郷土史家が言った。ㄓㄨㄥㄨㄥㄚㄥㄍㄉㄤだよ。知らないか? 中曾根。確かお前たちの首相じゃなかつたつけ。僕は頭を振りながら、いやでもあの頃僕はまだ小さかったから、とついつい訳の分からぬ言い訳を口にしていた。

小高い丘のような遙拝所跡からはすっかり廃墟になつてしまつた村全体が見渡せた。村の中にはまだ立ち退きに応じない家がいくつか残つていて、それはどこか大海原に浮かぶ孤島のように見えた。昨年の大統領選挙の際には、孤島の入口に蔡英文の選挙用の幟旗と中華民国国旗が逆さまに吊るされていた。かつて国民党の鉄票区と呼ばれたこの場所でもはやその「不敬」を咎める者は誰もいなかつた。日の落ちた廃墟では、浅黒い肌に艶やかなヒジャブを被つた介護師たちが操縦する車いすに載せられた元「島民」らしき人々の姿がちらほら見えた。

ミル・クレープ 千層蛋糕^{ミル・クレープ}のような廃墟。暗い大海原を前に再びそんな言葉が浮かぶ。いずれ自分が数ある廃墟の一部になっていく未来を想像しながら、僕は相変わらずこの高雄を歩き続けている。

楊華の詩と私

唐 頤芸（同志社大学）

時は2001年。学部時代に趣味で勉強した日本語をもう少し上達させたいと思い、勢いだけで日本に来た一年後のことだった。その日、遠景出版社が80年代に刊行した『乱都之恋』を図書館で偶然に手にした。本をパラパラとめくったら、この詩が目に止まった。

人們散了後秋千，
閒掛著一輪明月。

詩句を読んだ瞬間、昼下がりの図書館の中にいるにもかかわらず、月の柔らかい光と寂しげな景色が目の前に広がり、清冽な夜の空気に包まれたようであつた。魂も揺さぶられたほどの驚きで、しばらくその場に立ち尽くしていた。驚いたのは、

たったの2行でこれほど豊富なイメージと感情を載せているということだけではなく、台湾に生まれ育った20数年の間、なぜ、異国の図書館に来るまでこの詩を全く知らなかつたのかということであつた。

詩を書いたのは楊華という詩人。本名は楊顥達。1900年に生まれて、1936年に亡くなった。短い生涯に多くの漢詩と中国白話文が台湾話文で書かれた近代詩を残した。このような詩人について、私は作品を読むどころか、名前さえも聞いたことがなかった。なんとも言えない恥ずかしさと悔しさ、さらに楊華の詩をもっと知りたい、知ってもらいたい気持ちで、日本統治期台湾の近現代詩を研究する決意をした。

しかし、いざ研究を始めると、台湾の歴史に対して、あまりにも無知であることに気づき、文学を研究する前にまず歴史の勉強を始めなければならなかつた。今でも覚えているが、日本統治期の台湾人にとって、いわゆる「国語」は私が小学校から学校で勉強した中国語ではなく、日本語であったことを知ったときの衝撃。それほど、私は無知だった。このようにほぼゼロからのスタートで、私は台湾の過去を探検する旅に出発した。

台湾人が戦前から戦後にかけて二つの「国語」を経験したことを改めて知ったこともあって、詩人たちが詩を書くときに用いる言語にとても興味を持った。楊華の詩を読んすぐに気づいたのは、例えば「儂」(彼ら)、「哥」(～がしたい)など、当時台湾話文を提唱する人々が考へた造字を使用することである。このような詩はもちろん台湾語で読まないと理解できない。

一方で、一見中国白話文で書かれた詩でも、学校で学んだ中国語で読むと理解できないことがある。例えば、「心絃」の29番は、

露水的愛情是一慣的，
有頭有尾。
不管伊是花開也是花謝，
伊的愛情是一樣咧！

という4行の詩である。花が咲いても散っていても、露の愛情は終始一貫であることを詠っている。問題は下線を引いている3句目を中国語で読むと意味が通らない。中国語で「不管」(～にかかわらず)のあとに二つの相反する概念を繋げるときは「是A也是B」(AでありBでもある)ではなく、「是A還是B」(AそれともB)と書くべきである。しかし、この詩を台湾語で読むと「是～也是～」のところは「～それとも～」という意味であり、まさに中国語で「是～還是～」で書くのと同じ意

味である。つまり、楊華は書き間違ったのではなく、もともと台湾語を用いて書いたため、そのような表現になつたのである。このような詩はおそらく台湾語ができるないと、うまく解説することができないだろう。

このように楊華は台湾話文による創作をよく試みた。その中で、彼の一番成功した台湾話文詩で、当時においても現在から見ても傑作といえる作品は1932年に書かれた「女工悲曲」である。

星稀稀，風絲絲，
淒清的月光照着伊，
搔搔面，拭開目睭，
疑是天光時。
天光時，正是上工時，
莫遲疑，趕緊穿寒衣。
走！走！走！
趕到紡織工場去，
鐵門鎖緊緊，不得入去，
纔知受了月光欺。
想返去，月又斜西又驚來遲；
不返去，早飯未食腹裏空虛；
這時候，靜悄悄路上無人來去，
冷清清荒草迷離，
風颼颼冷透四肢，
樹疏疎月影掛在樹枝。
等了等鐵門又不開，
陣陣霜風較冷水，
冷呀！冷呀！
凍得伊腳縮手縮，難得支持，
等得伊身倦力疲，
直等到月落，鷄啼。

この詩のテーマは女工の労働環境を批判するものだったが、楊華は直接に批判するのではなく、女工の日常生活の一場面を見せることにした。女工が寝る時も安心できず、寒いこともお腹が空いたことも考える余裕がなく、ひたすら遅刻という小さなことに神経を尖らせている様子から、その労働環境の厳しさを想像できるだろう。

短い詩幅に起承転結があり、ストーリー性に富み、女工の心情も緊張から一旦安心して、また悩み始めて、さらにあきらめて我慢するなど、いく度も変化し、ドラマチックに描かれている。このような描き方によって、読者の女工に対する共感を最大限に引き出すことができたと言えよう。

そして、この詩を成功させるのに何より重要なのは、台湾語で書かれたことによって作り出されたリズム感であり、語尾の稀、絲、伊、時、疑、衣、去、欺、遲、虚、離、肢、枝、開、水、持、

疲、啼が全て「i」の韻を踏んでいるのみならず、文中に「i」母音の字が頻繁に使われることによって、全体的に音声の統一感を持たせていることがある。

楊華の台湾話文詩は、私に台湾語による近代文学創作の秘めた可能性を教えてくれたのみならず、日本統治期の台湾文学を研究するには、台湾語ができることの必要性を思い知らせてくれたのである。台北で生まれ育ち、80年代に義務教育を受けた私が、少しだけ台湾語ができるのは、台湾の民主化運動に感銘を受けた両親が家庭内で母語を話すことを堅持したおかげである。それが時を経てこのように役立つとは誰が想像できたであろう。

いくつもの偶然が重なって、私はいまこの道を歩んでいる。力不足を日々感じながらも、なんとかあきらめずにいるのは、あの日、昼下がりの図書館で初めて楊華の詩を読んだ時に感じた喜びと悔しさが、いつまでたっても忘れられないからである。

学会・シンポジウム等

参加記

広島大学東京オフィス
前衛としての台湾文学
—1990年代文化論再考—
国際シンポジウム参加記

三須祐介（立命館大学）

2016年10月22日、東京品川の広島大学東京オフィスにて、国際シンポジウム「前衛としての台湾文学」が開催された。筆者は発言者として関わったが、その立場から、シンポジウム全体を紹介したい。

シンポジウムの構成は以下のとおりである。第I部「1990年代台湾文化再考：雑誌『島嶼辺縁』から」司会：三木直大（広島大学）、発言者：紀大偉（政治大学）、山口守（日本大学）、垂水千恵（横浜国立大学）。第II部「文学史、映画史を書く：陳芳明×四方田犬彦」司会：山口守、発言者：陳芳明（政治大学）、四方田犬彦（比較文学者、映画史家）。第III部「もはや周縁ではない？：紀大偉に聞く台湾LGBT文学」司会：垂水千恵、発言者：紀大偉、三須祐介（立命館大学）。第IV部「総合討論」司会：山口守。

三つのセクションはそれぞれ台湾文学研究にとって重要なテーマを扱っており、それぞれが少しずつ連関するような形で構成されている。主に第III部までを中心に内容を辿ってみたい。

●見過ごされてきた90年代の前衛雑誌『島嶼辺縁』

第I部は、戒厳令解除後の台湾において、勃興する新台湾人アイデンティティなどの族群政治を脱構築し、さらにそれを乗り越え再構築しようという動きを、様々な背景をもつ主に留学帰りの新世代の知識人が中心となって創刊された雑誌『島嶼辺縁』(1991-95)から探ろうとするものである。これは、2016年5月の台湾学会学術大会第8分科会（座長：三木直大）のいわば延長線上に企画されたものである。台湾学会では、『島嶼辺縁』に実際に携わった洪凌（作家、世新大学）が招かれたが、今回は同じくこの雑誌に参与した同世代の紀大偉が招かれ、当時の思い出などを中心に語った。

1991年創刊当時はまだ学生だった紀大偉にとって『島嶼边缘』は体制外あるいは左翼の陣地という印象であった。初期の中心メンバーである陳光興の影響かもしれないが、当初は「国族」の問題が主に議論されていた。意見対立などでメンバーの交替が生じると、徐々に議論の中心はジェンダー／セクシュアリティの問題へと移っていく。メンバーは個人的にはそれほど親密ではなかったかもしれないが、それぞれがマージナルであるというところで結びついていた。そこに紀大偉らが「クリア（酷児）特集」（第10輯、1994）を企画した意味もあったのではないか。陳光興は紀大偉より世代が上で、省籍区分意識が強く、外省人と本省人の関係性を固定化してしまう傾向があった。紀は、これが雑誌停刊に至った原因のひとつかもしれないと考えている。

山口は、『島嶼边缘』とほぼ同時期に台湾に滞在し、関係者とも交流していた経験を踏まえ、少数のエリートによる活動の意味とその限界について批判的に発言した。たとえば、文化批判をするための戦略として「左翼」的姿勢を確保していたのではないか、あるいは小さな「国族」意識（＝新台湾人アイデンティティ〔筆者注〕）は批判しても大きな「国族」（＝（大）中国（人）意識〔筆者注〕）を批判しないのはなぜなのか、などである。陳芳明も、現在、とりわけひまわり学生運動後は新しいアイデンティティ意識が芽生え、知的エリートたちの市民や社会に対する関心は強まっている、『島嶼边缘』における「国族」問題は既に過去のものとなったと述べた。

読者が限られ、当時の社会においての影響力も限定的であった可能性は否定できないが、この雑誌に関わった若き知識人たちは、その後それぞれの立場で台湾の文化や学術を牽引していることも確かである。戒厳令解除後の台湾における省籍を超えた文化再編の種はここで蒔かれたとも言えるのではないか。『新しいもののなかに古いものがあり、古いもののなかに新しいものがある』

（三木）というように、たとえば「前衛（知的エリート）」と「大衆」の関係性も、古くて新しい問題である。また未だ省籍意識が固定化されがちな印象のある日本の台湾研究界にとっても再考るべき問題群が、この雑誌から浮き彫りになっていく可能性を感じたのである。

●文学と歴史が交錯する場所で

第Ⅱ部は、2011年に『台湾新文学史（以下、新文学史）』（聯經、2011；日本語版 東方書店、2015）を上梓した陳芳明に、映画史家であり、台湾滞在を基にしたエッセイ『台湾の歓び』（岩波書店、

2015）も刊行した四方田が問い合わせをする、という形で進められた。

四方田は、陳がアメリカでの亡命中（1977—92）に『新文学史』の構想を胚胎したことに触れ、ヨーロッパの文学史（『ミメーシス』）を亡命先である異郷の地（イスタンブール）で構想したアウエルバッハに陳をなぞらえることから語り始めた。その弟子にあたるフレデリック・ジェイムソンの「植民地経験のある第三世界の文学に学ぶべきだ」という主張に対して、第三世界を粗雑に一括りにする彼の傲慢さを批判したアフマド・ウルドゥを引きながら、四方田は、植民地経験の有無が本質的であるのか否か、という問題を陳に投げかけ、台湾文学の独自性について問うた。また、台湾文学史を中国文学史の一部に取り込むべきだという陳映真にも触れて、それを批判する陳芳明との間には直線的な歴史観（＝ヘーゲル主義）という共通項があるのでないか、とも指摘した。この問いは、宋澤茉『台湾文学三百年』を貫く「循環する時間」を念頭に置いたものだが、陳芳明の著作が『台湾新文学』の「歴史」であるとすれば、「新文学」というジャンルのみで台湾の文学を包摂することは可能か、という問題意識も孕んでいるだろう。

このような「世界のなかの台湾文学」を意識した問い合わせに対し、陳は、アメリカ時代に「台湾史」の真実を知った衝撃から始まる半生記を、クロニクル的かつ感動的に語ることで応えた。とりわけ二二八事件を知ったことが台湾のために歴史を書く契機となったこと、1979年の美麗島事件での多くの仲間の逮捕や翌年の林義雄事件が、政治運動へと身を投じる大きな転換点になったことを述べた。『ミメーシス』はヒューマニズムに満ちた書であると評価し、ヒューマニズムの視点から『新文学史』には女性、原住民、「同志（セクシュアル・マイノリティ）」の文学を入れたいと考えた。完成まで時間がかったのは、全ての作家の作品を読みたいという気持ちからだったという。また2008年に陳水扁批判をしたことで多くの友人が去り、それからの2年間は何もできなかつたという言葉も印象的であった。ジェイムソンのナショナル・アレゴリーには同意しないとした上で、中国でジェイムソンが受容されるのは、中国が戦略的に「第三世界」に属したからである。実際には中国は植民地にされてもいないし、母語や歴史記憶を失ってはいない。

また、四方田が「山海經」のように面白いと指摘する戒厳令解除以降の豊饒な台湾文学の世界に、生きているうちに触れられたことの歓びを、陳が語ったことも印象的であった。この後、さらに四

方田が『新文学史』は主に中国語で書かれたものを扱っており、台湾語で書くという問題にはあまり触れていないこと、またポルノグラフィーや大衆小説があまり取り上げられていない点も指摘した。陳は、台湾の読書市場が限られていることに触れながら、改訂への意欲も見せた。

また、フロアからは、『新文学史』の日本語訳に携わった下村作次郎（天理大学）、池上貞子（跡見学園女子大学）、垂水千恵も発言した。下村は、台湾にも日本にもない文学資料がアメリカにはあったという事実が陳の台湾研究を推進したこと、亡命時代の陳を訪ねた思い出等を語った。アメリカは、台湾文学にとって特別な場所であったことを改めて思い知らされたが、このことは、実は第Ⅲ部とも奇妙に共鳴をするのである。

●冷戦構造とアメリカという視点、あるいは「同志文学」というフィールド

「同志文学」は陳芳明の『新文学史』でも一節を割かれるなど注目を集めている。もはやマージナルとは言えないかもしれない台湾のセクシュアル・マイノリティ（LGBT）の文化や文学について（垂水千恵「すでに周縁ではない？台湾 LGBTQ 文学」（『すばる』2016 年 8 月号）を参照）、その最先端を行く紀大偉に聞く、というのが第Ⅲ部の主旨である。

筆者は企画からこのセッションに関わり、司会の垂水千恵と質問事項を検討したうえで紀にあらかじめ送るなど準備をしていた。質問は 5 点である。①「同志文学」というカテゴリーを構築する意義はなにか、②「同志文学」を「文学史」として構築する意義はなにか、③「クィア（酷児）」と「同志」の関係について、④「同志文学」は誰のための文学か、⑤「同志文学」と「民主化」、「同志運動」の関係について。当日はこれらの問題に直接的に答えるというよりは、その後刊行された『同志文学史：台湾的発明』（聯經、2017 [筆者未見]）の脱稿直後だったからか、この著作の意図やパースペクティブを共有するというような報告となつた。

とりわけ興味深かったのは、紀が、これまでの台湾文学史が「解嚴」を結節点として捉えていることに挑戦し、戦後台湾とアメリカとの関係を軸に読み解いていこうとした点である。そこには「冷戦前」「冷戦下」「ポスト冷戦」という枠組みと、アジアに対するアメリカのコントロール（抑圧）という問題意識があった。またこれまでの同志文学研究は、60 年代の白先勇作品から説き起こすことが一般的だが、実は 50 年代の「同志文学」を発見したことなど、新たな知見が盛り込まれている

点である。さらに、「同志文学」のとらえ方については、「ジャンル」に閉じ込めず、ブルデューの言う「場（champs）」あるいは「フィールド」という概念で「同志」をめぐる言説の広がりを見ることの重要性も指摘した。

筆者は、まずセッションのタイトルでもある「台湾 LGBT はもはや周縁ではないのか？」という問い合わせて、台湾じたいの「周縁性」とセクシュアル・マイノリティの周縁性とが互いに共鳴し合うことで生まれる文化のダイナミクスについて指摘し、むしろ「主流化」することが危険性を孕む可能性についても言及した。それはジョセфин・ホー（何春蕤）が「国家フェミニスト」を批判する（『「性／別」撹乱—台湾における性政治』御茶の水書房、2013）問題意識とも繋がっている。主流化することで既成の価値観を批判する異議申立て（クィアネス）が力を失う可能性である。たとえば同性婚の要求は政治的には正しいが、既成の婚姻制度の問題点を不可視化してしまう可能性もある。これはアメリカで近年議論されているホモ・ノーマティビティ（あるいはホモ・ナショナリズム）という概念と関係するが、無条件に台湾における参照系にすることはできない。しかし、紀が「アメリカ」を参照系に新たな同志文学研究を進める以上は留意すべき点であろう。

また、台湾におけるジェンダー／セクシュアリティの議論は、『島嶼边缘』の活動にも見られるように、族群政治を乗り越える意味で有効であったが、近年の「LGBT」という概念は逆にセクシュアル・マイノリティを細分化し再びアイデンティティの政治へと導きかねない。その意味で、ゆるやかにセクシュアル・マイノリティを連帯させる「同志」概念は有効なのではないだろうか。

紀は、同志文学における「フィールド（領域）」を意識しており、その意味で、純粋なテクスト研究というよりはテクストと社会との関わりに重点を置いている。これはとりわけ台湾の「文学史」を書く上では重要なことなのかもしれない。一方で、台湾を含む中国語圏の「同志」テクストに目配りした、桑梓蘭『浮現中的女同性恋：現代中国的女同性愛欲』（台大出版、2014）や許維賢『從艷史到性史：同志書寫與近現代中国的男性建構』（遠流、2015：台湾はほぼ含まず）も近年の成果として特筆すべきものである。「同志」概念そのものの中国語圏における広がりによって、今後「台湾に限定した同志文学」を研究することの意味がますます問われていくことになるだろう。

この日の議論から、「前衛」、「歴史」、「周縁」という 3 つの大きなテーマが浮き彫りにされたが、

総合討論で、四方田が触れたドキュメンタリー映画『日曜日式散歩者』とそこに描かれた日治期台湾の風車詩社とモダニズム詩も、まさにこの3つのテーマと響き合う問題を孕んでおり、「台湾文学」の広がりと奥深さを改めて感じさせるものだった。テーマが幅広かったこともありフロアとの討論の時間がじゅうぶんとれなかったのが残念ではあるが、しかしこれもこの日の議論が充実していたことの証左であろう。(敬称略)

学界動向

日本における台湾原住民族文学研究 —翻訳・研究の現状と展望—

魚住悦子
(天理大学国際学部非常勤講師)

2016年9月、数年ぶりに台湾原住民族文学論壇に参加した。今回は第7回にあたり、10日11日の2日間にわたって台北駅近くの台湾国際芸術村で開催された。

この文学論壇は行政院台湾原住民族委員会と台湾原住民族文化発展協会、山海文化雑誌社が主体となって毎年開かれており、原住民族文学とその周辺の議題について論じ合ってきた。今回はサイシヤット語の komita'（見る、聞く）をテーマとして、8つの場を設け、政治、文学、芸術、文化、映像と音声、翻訳と国際交流、文献、自然環境などについて議論された。参加者はパネリスト、聴衆ともに原住民族、漢民族、外国人で、職業も作家、芸術家、研究者、文化工作者、メディア従事者、教師、学生、一般市民など多様であった。パネリストは25名、聴衆は両日とも百名前後であった。

1日目の第1場では原住民族がペンで政治に訴える可能性が語られた。第2場では、タオ族作家のシャマン・ラボガンと漢民族作家の甘耀明（アミ族の女性を描いた『邦查女孩』で2015年台湾文学賞を受賞）、陳耀昌が今後の原住民族文学の発展の方向について語った。なお、陳耀昌はローバー号事件前後の恒春半島の原住民族や平埔族を描いた『傀儡花』で2016年台湾文学賞を受賞した。また、甘耀明の作品は『神秘列車』（2015年）、『鬼殺し（上）（下）』（2016年）が白水紀子訳で白水社から出版されている。

2日日の第6場では、台湾原住民族文学の韓国語訳を行っている李淑娟が、韓国における原住民族文学の受容について述べた。この報告を聞く限り、韓国での原住民族文学研究はようやくはじまったばかりのようである。

最後の第8場の総合討論では、司会をつとめたプユマ族作家のパタイ（現、台湾原住民作家ペンクラブ会長）が、1996年からの20年間に10数名の原住民作家が現われて70数冊の作品が書かれたと述べ、これは特記すべきことだとしたうえで、

しかしながら台湾文学の市場において原住民族文学は重視されておらず、パタイ自身の最も多く売れた作品でも5千部に達しないと述べた。そして今後は文字だけでなく、映像やネットを通していっそう多くの人が原住民作家や作品、その背景に触れ、学校でも原住民族文学の作品が扱われることが肝要だと述べ、さらに、近い将来に新しい世代の作家が数名現れるだろうと期待を述べた。

今回、文学論壇に参加して感じたことのひとつは、今後の台湾原住民族文学の発展の方向として、歴史分野の創作があげられるということである。

文学論壇の前月、8月1日「原住民族の日」に蔡英文総統が原住民族への謝罪を行い、「移行期の正義（轉型正義）」に言及した。それを踏まえて、第1場でタイヤル族作家ワリス・ノカンは台湾歴史と原住民族文学発展との連関を述べた。パタイはこれまでプユマ族の歴史を書いてきたが、『暗礁』（2015年）、『浪濤』（未刊）では琉球人遭難事件（1871年）と牡丹社事件（1874年）を書いている。パネリストとして登壇したマサオ・アキ（タイヤル族）と李永松（同）もタイヤル族の歴史を題材とした作品を書いていると述べた。なおマサオ・アキの『記憶洄游 泰雅在呼喚 1935』は2016年末に出版された。2日間の議論を通して、原住民族による歴史記述が今後いっそう活発に行われるだろうという予感を持った。

以上が、筆者が管見した台湾における原住民族文学の現況である。文学論壇の第2場が「苦境と突破」と題されたように、原住民族文学をめぐる状況は決して楽観的なものではない。では、日本では台湾原住民族文学の翻訳と研究はどのような状況にあるだろうか。

あらためて振り返ると、日本で最初に台湾原住民族文学が紹介されたのは1992年の『悲情の山地』（下村作次郎監訳、田畠書店）である。原著は吳錦発の『悲情的山林』で、原住民族作家だけではなく漢民族作家の作品も収録されていた。その後、原住民族文学が発展すると、日本でその作品や言説を編集翻訳して『台湾原住民文学選』全9巻（草風館、2002～09年）が出版された。この文学選には30人の原住民作家の作品や研究者の論考が収録されている。

この文学選の出版以降は、個人作家の作品を翻訳出版する時期に入り、パアラバン・ダナパン（孫大川）著・下村作次郎訳『台湾エスニックマイノリティ文学論—山と海の文学世界』（2012年）、パタイ著・筆者訳『タマラカウ物語』上下二巻（同）、シャマン・ラポガン著・筆者訳『冷海深情』（2014年）、同著・下村作次郎訳『空の目』（同）がいずれも草風館から出版された。『悲情の山地』から数

えて計15冊である。現在、シャマン・ラポガン著『大海浮夢』とパタイ著『暗礁』が翻訳の過程にあり、それぞれ2017年、2018年に出版を予定している。

日本における台湾原住民族文学の翻訳出版は厳しい状況にあるが、はたして日本では原住民族文学はどのくらい受け入れられているのだろうか。CiNiiで検索してみると、日本の大学図書館では、『台湾原住民文学選』は100館前後の図書館が所蔵している。しかし最新の出版である『冷海深情』『空の目』の所蔵館は23館にすぎない。

では台湾原住民族文学の研究は進んでいるのだろうか。2004年の日本台湾学会第6回学術大会では「台湾原住民族文学とは何か？」をテーマとした分科会を設けて、日台の研究者や作家が報告し、筆者は『日本台湾学会報第7号』（2005年）に「台湾原住民族作家たちの『回帰部落』とその後」を発表した。

台湾原住民族文学研究の成果は主として翻訳書の解説として発表されてきた。ちなみに文学選の第8巻と第9巻は『原住民文化・文学言説集』となっており、原住民族や漢民族による研究論考を収録している。

それ以外の研究論文には、筆者著「原住民族女性作家の誕生—リカラッ・アワーのアイデンティティー」（『台湾原住民族の現在』、草風館、2004年）、垂水千恵著「台湾原住民文学における『霧社』の記憶をめぐって—不可能性からの対話」（『記憶する台湾—帝国との相剋』、東大出版会、2005年）、下村作次郎著「翻訳からみる台湾原住民族文学に描かれた女性像—原住民族女性は『可視化』されてきたか」（『現代台湾文学にみるジェンダー・ポリティクスとセクシャリティの編成』（2009～2011年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書＜代表、白水紀子＞、2011年）があり、さらに『台湾原住民族の音楽と文化』（草風館、2013年）には、陳芷凡著「『原』から歌があった—台湾原住民文学／歌謡の対話と文化想像」と筆者著「『稗官』パタイの歴史小説」が収録されている。

また、2014年に出版された中島利郎ほか編著『台湾近現代文学史』（研文出版）には、筆者著の「台湾原住民族文学の誕生—ペンをとった台湾原住民族」が収められているが、そこでは台湾原住民族文学の歴史を次のように概述した。

台湾原住民族は文字を持たず、口承で文学を伝えてきたが、日本統治時代に著作言語を獲得し、さらに戦後、中国語を習得すると、1960年代後半には中国語で創作を試みる陳英雄（パイワン族）のような作家が現れた。さらに1980年に入って書かれる対象から書く主体へと転換した原住民族は、

神話の文字化や詩や小説の創作を通じて主体性の確立を目指し、やがてシャマン・ラポガンの「黒い胸びれ」のような長編小説が書かれるまでになった。今では為政者側が残した「理蕃」資料や人類学者の文献などを詳細に検証し、民族に伝わる故事とつきあわせて、原住民族の視点から見た歴史を書くパタイのような作家も現れている。

筆者の知る範囲では、台湾原住民族文学の最新の研究発表としては、2016年6月に国立台湾文学館で開かれた日台「文学と歌謡」国際学術シンポジウムで、筆者が発表した「原住民作家パタイは『八瑤湾琉球人遭難事件』をどう描いたか」がある。牡丹社事件のきっかけとなった琉球人遭難事件をめぐる歴史記述に視点を置いて、パタイの『暗礁』と中村地平の『長耳国漂流記』(1941年)を比較分析したものである。

さて、現在、日本で最もよく知られている原住民作家はシャマン・ラポガンである。代表作「黒い胸びれ」(筆者訳、2003年)が翻訳出版されて以来、津島佑子や高樹のぶ子をはじめとする日本の作家たちがシャマン・ラポガンの文学に深い関心を寄せてきた。彼は2010年9月、東京で開催された国際ペン東京大会に台湾の文学者を代表して招かれてパネリストを務め、2016年3月には日本財団が主催した東京国際文芸フェスティバルで高樹のぶ子と対談した。この対談には筆者も訳者として同席したが、さらに同年7月に台湾文化センターで開催された「台湾原住民作家が語る—島嶼での創作と思考」では筆者と対談し、自己の海洋文学や今後の創作について語った。

シャマン・ラポガンの作品は上述したほかに、高樹のぶ子が主宰した「アジアに浸るSIAプロジェクト」(九州大学、2006~10年)の成果である『天国の風—アジア短篇ベスト・セレクション』(新潮社、2011年)に「神様の若い天使」、「天使の父親」(筆者訳)が収録されている。また2016年2月に亡くなった津島佑子への追悼文「東京のお姉さん」(筆者訳)が雑誌『スバル』(2016年6月号)に掲載され、『津島佑子』(河出書房新社、2017年)に収録された。

シャマン・ラポガンは独自の海洋文学觀を持つ作家だが、東日本大震災後は故郷蘭嶼の核廃棄物貯蔵場の問題が注目を浴びるようになり、反核に関連する集まりのために来日することも多くなつた。2012年11月には日本社会文学会に招かれて熊本学園大学で開かれた大会に参加し、「民族運動(反核廃棄物運動)と文学の創作」を発表した。この報告は下村作次郎訳で『社会文学第38号』(2013年7月)に収められている。また、2016

年7月には植民地文化学会に招かれて「わが文学と海洋」と題する講演などを行った。

最新のニュースでは、ワリス・ノカンが今年(2017年)1月に来日した。台湾文化センターで開かれた「シアターコモンズ 北投／東京—ヘテロトピアの交わる場所」に参加し、歴史に取材した詩「キパタウ社にやってきたパタウ」と「グラソ フォン ブラン(素晴らしい白色)」を発表した。「キパタウ社にやってきたパタウ」は滅亡させられた平埔族を、「グラソ フォン ブラン」は南洋に駆り出された高砂義勇隊を描いた藤田嗣治を歌った詩である。

冒頭にあげた台湾原住民族文学論壇で、パタイはこの20年の台湾原住民族文学は活況を呈したが、読者層が育っていないと述べた。読者が少ない点は、日本も同じである。この苦境を突破するには、困難な道ではあるが翻訳活動を地道に続けていくことだと思う。

台湾原住民族文学に関心を持つ若い世代が現れることが切に望まれる。

日本台湾学会活動報告

定例研究会 歴史・政治・経済部会

担当理事：小笠原欣幸（東京外国语大学）

第112回日本台湾学会定例研究会活動内容

共催：早稲田大学台湾研究所、早稲田大学東アジアの政治と思想研究部会

日時：2016年11月25日（金）18:20～20:20

場所：早稲田大学3号館306号室

司会：梅森直之（早稲田大学）

報告：呉佩珍（政治大学）

題目：明治維新の「敗者」と植民地台湾

—北白川宮能久親王の征台言説と表象を中心に

参加人数：23名

活動報告：

本報告では、文学研究の視点から、台湾神社が落成されたのち、とくに1910年代における、北白川宮の前半生を含む伝記小説・伝説というジャンルを通して、植民地台湾における北白川宮の征台言説とその表象を考察した。北白川宮の台湾征戦の事跡は、伝記と伝説という形式を通し反復/再生されるなかで、台湾で一般化された。こうして、北白川宮征台言説は、日本の台湾統治の精神的象徴となっていました。しかし、歴史的には、北白川宮が明治維新の際に幕府と朝廷との政争に巻き込まれ、東北朝に擁立されて新帝となり、謀反人とみなされることになったのであった。

現在の日本における台湾植民史は、明治維新以後の薩州政権の「勝者」史観によって構築され、認識されている。このような背景のもとで、台湾における明治維新の「敗者」である北白川宮の征台言説が、どのような史観によって描かれているのかを分析することは、明治維新史の再検討に関して重要な意義を有するだろう。こうした問題意識から、報告者の呉氏は、森鷗外の『能久親王事蹟』と『台湾日日新報』における講談『北白川宮殿下』を分析した。

結論としては、森鷗外の『能久親王事蹟』と『台湾日日新報』に掲載された『北白川宮殿下』とは、強烈な対照をなしているということである。勝者史観にたつ森鷗外の『能久親王事蹟』は、東北「敗者」史観とは大部かけ離れている。それに対して、

『台湾日日新報』にある松林伯知の『北白川宮殿下』と「北白川宮仙台御滞在中の御事」では、東北「敗者」史観に立脚して北白川宮像を構築していた。

（記録者：魏 逸瑩）

第113回日本台湾学会定例研究会活動内容

共催：早稲田大学台湾研究所、早稲田大学東アジアの政治と思想研究部会

日時：2016年12月17日（土）15:00～18:00

場所：早稲田大学3号館704号室

司会：春山明哲（早稲田大学）

報告：駒込武（京都大学）

コメンテーター1：北村嘉恵（北海道大学）

コメンテーター2：松谷基和（東北学院大学）

題目：帝国日本の台湾支配とキリスト教

—韓国キリスト教史を相互参照の視座として

（付記 駒込武著『世界史のなかの台湾植民地支配—台南長老教中学校からの視座』（岩波書店、2016年）をめぐって）

参加人数：33名

活動報告：

本研究会は、報告者駒込氏が2015年に上梓した表題の著書について、著者とコメンテーターとの質疑応答を中心とした合同書評会である。報告者によれば、本書は1885年、英國の宣教師が台灣に設立した台南長老教中学校をめぐる日本、英國、そして台灣の三者間の宗教観の衝突や妥協を通して、複数の帝国間の角逐のなかで折り重なる暴力に晒されながら、「台灣人」という集合的主体の拠り所となるべき自治を求めていく過程を描き出そうというものである。

植民地支配下にあって「台灣人の学校」を築こうとした台灣人教師林茂生らの葛藤から、植民地、人種主義、同化といった問題群を浮かび上がらせ、帝国日本による台灣植民地支配の意味について、日本史・東洋史・西洋史といった垣根、あるいは実証研究と文化理論といった垣根を横断しつつ、世界史的な脈絡から問い合わせることが本書の主眼として強調された。これに対してコメンテーターからは、「台灣人」の定義や「世界史」という視点の意味（北村氏）、日本や台灣それぞれの宣教師間の教義をめぐる衝突を論じる必要（松谷氏）などの質問や批評が提出され、会場内からの質問も含め、活発な議論が交わされた。

（記録者：遠藤正敬）

第114回日本台灣学会定例研究会活動内容

共催：早稲田大学台湾研究所、早稲田大学東アジアの政治と思想研究部会
日時：2017年1月27日（金）18:20～20:20
場所：早稲田大学3号館306号室
司会：若林正文（早稲田大学）
報告：島田大輔（早稲田大学東アジア国際問題研究所招聘研究員）
題目：日本の大衆娯楽紙はなぜ國府の國際反共宣言に動員されたのか？—1950年代における『内外タイムス』の台湾進出をめぐる諸問題
参加人数：18名

活動内容：

本報告は、華僑によって経営されていた戦後日本の大衆娯楽紙である『内外タイムス』を、中華民国政府の反共宣伝との関わりの面から分析し、その特質を明らかにしたものである。従来の研究では、在日華僑メディアのひとつとして内外タイムスは位置付けられてきたものの、その大衆娯楽紙としての性質から、政治的な側面は等閑視されてきた。本報告は、報告者の内外タイムスに関する一連の歴史研究の最新の成果の一部である。その内容は下記の通りである。

内外タイムスは1950年に羅錦卿から蔡長庚へと経営が移って以後、顕著に「黄色化」が進んでいく一方、台湾分社を設立し、1951年初頭より台湾において日本と同様の版面の販売を開始する。しかし同年末より、台湾で発行されていた日本語新聞である軍民導報の停刊の穴を埋める必要から、国民党中央は内外タイムスをその代替とした。その結果、政府の求めによって扇情的な記事を減らし、反共宣伝記事を増やした台湾版の内外タイムスが発行されることとなったのである。しかし實際には内外タイムスの黄色記事はその後も台湾の紙面に載り続け、1952年以降複数回に渡り台湾当局の発禁処分を受けていた。中華民国政府は台湾版を廃して日本版紙面に統合し、対日反共宣伝を強化することを試みるもの、蔡社長の強硬な反発にあい頓挫、以後台湾版と日本版の版面分離は維持されることとなった。

以上の報告に対し、中華民国政府の対外宣伝全体からの位置付けや、紙面の「黄色」傾向と広告収入との関係、読売新聞との関係に関する質疑が行われた。

（記録者：鶴園裕基）

定例研究会

関西部会研究大会

担当理事：澤井律之（京都光華女子大学）

関西部会では、第14回関西部会研究大会を2016年12月17日（土）に京都光華女子大学で開催した。プログラムは以下のとおり。

①低成長期における台湾の対外政策

—格差への認識と「敵」の創造が対外政策に与える影響

吉田知史（同志社大学・院）

評論：北波道子（関西大学）

②マルクス主義への傾倒から台湾独立思想の誕生 —史明の台湾独立思想の原点についての考察

郭銳（神戸大学・院）

評論：滝田豪（京都産業大学）

③帝国崩壊に伴う人の移動と「在日中華民国僑民」 社会の変容—外省人の来日と国民党駐日支部の「改造」に注目して

岡野翔太（大阪大学・院）

評論：安井三吉（神戸大学名誉教授）

④仏教の地域社会化と祭祀圏の変容

—九二一大地震後の被災地における慈済会と民間宗教の邂逅

村島健司（関西学院大学）

評論：五十嵐真子

⑤日本統治時代における刑事事件の「未成年犯罪者」

林政佑（京都大学・院）

評論：やまだあつし（名古屋市立大学）

吉田氏は、目下の台湾の外交政策において、馬英九政権下の「全方位的開放政策」から蔡英文政権の「選択的開放政策」への転換がなぜおきたかを論じた。郭銳氏は、台湾独立運動家の史明について、戦前のマルクス主義の影響や中国大陆での生活体験を取り上げ、史明の思想の変遷を論じた。岡野氏は、在日華僑社会の変容を中国国民党との関係から論じた。コメントに、非会員の安井三吉先生のご協力を仰いだ。村島氏は、豊富なフィールド調査をもとに台湾の仏教団体の慈済会の活動の実態を論じた。林氏は、日本殖民地時期における未成年犯罪について裁判記録をもとに論じた。

①から③は大学院生らしい、荒削りではあるが今後が期待される発表であった。④⑤はいずれも

若手中堅研究者による、学術水準の高い発表であった。

参加者は 27 名。東京方面から佐藤幸人理事長、学会 HP 担当の山崎直也氏もお見えになった。学会終了後、大学最寄りの駅（阪急西京極）の裏口にある石窯焼ピザ居酒屋「ぼっさ」で懇親会をもった。新たな仲間も得た愉快で貴重な一時であった。

テーマ：台湾における佐藤春夫

—その人脈と訪問先の現在

使用言語：日本語

学会運営関連報告

担当理事：星名宏修（一橋大学）

定例研究会

台北

担当幹事：畠田哲（台湾・淡江大学）

第 72 回台北定例研究会

日時：2016 年 3 月 5 日（土）15:00

場所：台湾大学台湾文学研究所

報告者：清水美里（日本学術振興会特別研究員（PD）、東京外国语大学・早稲田大学非常勤講師）

コメンテーター：郭雲萍（開南大学観光与餐飲旅館学系）

テーマ：嘉南大圳の「公共」性と暴力の併存

使用言語：日本語

第 73 回台北定例研究会

日時：2016 年 12 月 10 日（土）15:00

場所：台湾大学台湾文学研究所

報告者：松田良孝（フリージャーナリスト）

テーマ：沖縄から台湾体験をたどり直す

—八重山台湾親善交流協会の活動

使用言語：日本語

第 74 回台北定例研究会

日時：2017 年 2 月 18 日（土）15:00

場所：台湾大学台湾文学研究所

報告者：坂元さおり（輔仁大学日本語文学系）

コメンテーター：謝惠貞（文藻外語大学日本語文学系）

テーマ：ハードボイルドという手法と〈台湾〉

—東山彰良、船戸与一を中心に

使用言語：日本語

第 75 回台北定例研究会

日時：2017 年 3 月 11 日（土）15:00

場所：台湾大学台湾文学研究所

報告者：河野龍也（実践女子大学文学部、中央研究院中国文哲研究所訪問学者）

コメンテーター：張文薰（台湾大学台湾文学研究所）

第 9 期理事会

第 5 回常任理事会議事録（抄）

日時 2016 年 12 月 10 日（土）13 時 00 分～17 時

00 分

場所 関西大学東京センター

出席 上水流久彦、川上桃子、北波道子、洪郁如、佐藤幸人、垂水千恵、星名宏修、三澤真美恵（以上常任理事）、駒込武（第 19 回学術大会実行委員長）

委任状 松田康博

主宰 佐藤幸人理事長

書記 家永真幸

報告

1. 理事長・事務局

(1) 佐藤理事長

特になし。

(2) 星名総務担当理事

特になし。

2. 各業務担当

(1) 星名総務担当理事

特になし。

(2) 北波会計財務担当理事

映写資料に基づいて、現時点での会費納入状況が説明された。

(3) 上水流編集委員長

配布資料に基づいて、19 号編集作業につき、採用状況、書評依頼状況等が説明された。

(4) 川上企画委員長

大会報告への応募状況について報告された。内容については審議事項のため後述。

(5) 洪広報担当理事

配布資料に基づき、山崎幹事からの報告として、HP・ブログの運用状況および、メール情報配信サービスの不達状況について説明された。続いて大東幹事からの報告として、ニュースレターの発行状況が説明され、あわせて執筆者や取り扱うテーマの自薦他薦が呼びかけられた。

在席の常任理事より、著作を出版した会員本人による著作紹介のコーナーを設けてはどうかとの意見が出た。

(6) 三澤目録担当理事

「戦後日本における台湾関連文献目録」データベースは、2016年9月末現在、交流協会に提出済データは14,540件。前回報告時(2016年6月22日更新、13,052件)より1,512件増加した。ただしHP上では前回更新分までしか反映されていないことが報告された。

(7) 松田国際交流担当理事

特になし。

(8) 北波関西部会担当理事

関西部会研究大会の準備状況につき報告された。星名理事より、事前申し込みの要否について公示してはどうかと提案された。

3. その他

特になし。

議題

1. 第19回学術大会について

(1) 分科会企画・自由論題報告について

川上理事より、配布資料に基づいて審議結果案が提示され、満場異議なく承認された。

(2) 会場校の準備状況について

駒込大会実行委員長より、配布資料に基づいて準備状況が説明された。総会の時間などについて、在席の理事の修正意見を踏まえ、準備を進めることとが承認された。

弁当については、会場校では用意せず、持ち込み弁当を食べるのは可とすること。そのことについてプログラムや4月の大会案内で強調することが確認された。

(3) 大会予算案について

駒込大会実行委員長より、配布資料に基づいて予算案が提案され、審議を経て承認された。

(4) 大会プレ企画について

欠席の松田理事より事前に送付されたメールを星名理事が代読し、審議に付された。常任理事会より、松田理事への依頼事項および提案をまとめ、後日連絡することが決定された。

2. 理事選挙について

星名理事より、配布資料に基づいて理事選挙の方法について報告された。審議の結果、修正提案を踏まえ、準備を進めることが承認された。

佐藤理事長より、電子投票の導入について今後検討する必要があるとの問題提起がなされ、次期

常任理事会への申し送り事項とすることが確認された。

3. 会員の入退会について

星名理事より、入会者につき、下記10名の入会申請書が回覧され、いずれも承認された(敬称略)。

笹田敬太郎(鳥取県中山間地域研究センター)

小熊旭(桜美林大学)

邱比特(台湾・国立台湾師範大学)

野場惇平(台湾・東海大学)

中川純(北星学園大学)

根岸忠(高知県立大学)

劉靈均(神戸大学大学院)

西本秀(朝日新聞社)

廣野聰子(早稲田大学)

中村平(広島大学大学院)

退会者として、岩永康久会員、渡辺欣雄会員が報告された。

4. 会員名簿の改訂について

星名理事より、山崎幹事、事務局の鶴岡さんと相談しながら進めている旨報告された。ウェブを通じて情報を集めること、変更届のフォーマットを改定し、電子化によってエクセルで出力できるようになること等が説明された。

閲覧方法、パスワード付き電子ファイル配布の可否については継続審議となつた。

5. 学会報のオープンアクセス化について

上水流理事より、配布資料に基づいて学会誌掲載論文のウェブ公開につき、「発行から2年たってHPで公開」という現在のあり方に対して、①即時公開、②公開までの時間の縮小、③現在のまま、の3案が提示され、審議に付された。上水流理事より、総会で意見を聞く機会を設けたいとの提案があり、次回総会で実施することが承認された。

6. 次回の常任理事会の日程について(星名)

3月5日(日)13-17時に開催することが確定された。

7. その他

佐藤理事長より、再来年の第20回大会の準備状況について説明され、企画案等につき意見聴取がなされた。

上水流理事より、学会誌の審査結果の常任理事会への報告方法につき、照会された。

星名理事より、日本学術会議の学会年鑑からアンケート回答の要求が来た旨報告された。

以上

＊＊＊＊＊＊＊＊ 編集後記 ＊＊＊＊＊＊＊＊

・第 26 号の特集「記憶の中の台湾—思い出の場所、思い出の人—」を、本号でも再び特集として組んでみました。会員の皆様にとっても、忘れない土地・人の記憶がおありかと思います。本号の記事が皆様の記憶を喚起する触媒となることを願っております。

・「学界動向」を各分野の研究の現状や展望を記す場としても機能させたいと考えております。「〇〇研究の現状と展望」といった記事を、今後定期的に掲載することで、当該分野に関心のある方々、研究を始めて間もない方々の参考に供し、研究が進展することを企図しております。

・ニュースレターは会員による情報交換の場もあります。台湾と関わるシンポジウム・研究会・展示等の参加記や、学術交流の動向など、積極的なご投稿をお願い申し上げます。

(大東和重)

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

日本台湾学会ニュースレター 第 32 号

発 行：日本台湾学会（代表 佐藤幸人）
発行年月：2017 年 4 月

■日本台湾学会事務局

〒261-8545 千葉県千葉市美浜区若葉 3-2-2
アジア経済研究所 佐藤幸人研究室 気付
E-mail: nihontaiwangakkai@gmail.com

■ニュースレター発行事務局

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町 1-155
関西学院大学法学部 大東和重研究室 気付
E-mail: kaohigashi@kwansei.ac.jp